

# 防人歌の神

渡 部 和 雄

—  
人々はギリシヤの哲学や旧・新約聖書の言葉によつて、彼らの思想を形成していくのであろう。そうした一般性に対して、

「認識」と訳されるグノーシス（主義）の思想がある。それは個人の性質らしい。

へそして彼らは、私が地上に分裂、火、刀、戦争を投げ込むために来た（ことを知らない）

へ私が来たのは、一家の中で五人が相分かれて、三人は二人に、二人は三人に対立し、父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に、姑は嫁に、嫁は姑に対立させるためである

というのはマタイ・ルカを含めて言つてみたが、イエス（神の子）は分裂＝対立を、この世に投げ込むとしている。

へ神の子が見える」とことと、家庭内分裂は似ている。いわば家庭分裂の中に神が立っている。多分、イエスは相互疎外、分裂の一片であつて、それがひとりということだろう。

そこに、『トマス福音書』は、こうつけ加える。へそして、彼らは一人で立つてであろう」ひとりて立つのは神の子である。ひとり、は外からやって来、家で疎外された息子である。

一人＝単独者は知覚の起源で神への系譜。

二三 イエスが言った、「私はあなたがたを、千人から一人を、一万人から二人を選ぶであろう。そして、彼らは単独者として立つてであろう。(トマス)

一人は社会生活とへさかさまである。集団性(国、そして大国)では言葉は不可能である。話せば話すほど支配性秩序記号となる。

神というのは唯一、言葉の可能性である。

言葉が先で、それが神である。説明から生まれるものはない。集団には言葉への思考能力が存在しない。

一〇〇 人々がイエスに金(貨)を示し、そして彼に言った。「カイザルの人々が私たちから貢を要求します」。彼が彼らに言った。「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。そして私のものは私に返しなさい。

最後の「そして私のものは……」はマタイ、マルコ、ルカの並行文にはないグノーシスである。荒井献氏は「私のものとは、人間に内在している本来的自己のことであろう」といわれる。そんなものがあるとして……。同氏は「神とカイザルは『私』によって相対化される」という。もしそんなことが可能であるとしたら、そこにこそ「認識」という意味が存在するのである。

このような「自己」と国家・社会・家との関係の認識が神なのである。故にグノーシスは神への筋道である。

「本来的自己」などというものは神なしにはありえない。

グノーシスに「奇蹟」はあるまい。健康に復帰という構造はないものである。

ひとりである自己もまたないものである。カイザル、国家の在る所に個人は存在しない。

ひとり（自己）は二人以上の人と話す術を持たない。二人以上に話すことができるのは支配と抑圧の性質である。人は国家と政治にそってだけ言葉が可能なのである。

で、まあ、

「私たちが孤独から体得するのは独りである術ではなく、唯一者である術だ。」（シオラン）という言葉もある。さて「孤独」とは温体動物から死までへの距離らしい。シオランはまた、

「私たちは独りだが、すべての孤独と一緒にだ。」

ともいう。この子を獣へんにして、

へ狐には穴があり、空の鳥には巢がある。しかし、人の子には枕する所がない

といったのはイエスである。寒さという孤独。

そう、神の子はホームレスであつた。

生から離れて、

「沈黙は生の対蹠点に居すわる。」（シオラン）

六七 イエスが言った、「すべてを知っていて、自己に欠けている者は、すべてのところに欠けている。」

人を生かすように、国家、社会は極多量の法律を作り続ける。法律の全部を理解し、体得しても、ひとりが生きることは何の関係もあるまい。

人が歴史だと思つて、その生命の基盤のような世界は、強引に不可能性の言葉をつめ込んでいる。言語の不可能性は支配の性質、政治家の相貌には現われている。

言葉（表現）はそれ自体で一切を完成させている。ここに論理はない。何を説明しているわけでも証明しているわけでもない。〈自己に欠けている者は、すべてのところに欠けている〉のである。その言葉だけが〈在る〉。

グノーシス（認識・覚知）というのは多分、怒りの実感である。

言語の不可能性というのは支配者の相貌のようなものである。

## 二

東歌の神と防人歌の神は様相を異にする。

東歌には、

三五一六 対馬の嶺は下雲あらなむ可牟能祢尔たなびく雲を見つつ偲はも

三五六六 我妹に吾が恋ひ死なば曾和敵可毛加末尔於保世牟心知らずて

と、「神」と訓まれそうな所が二ヶ所ある。共に名前を持たない神である。

防人歌には、三種類に分けてみると、

① 鹿島の神。固有名詞を持つ神。風土記に出ている。

② あすはの神。普通名詞の神。古事記に出てくる。

③ ただの神。自然の神。東歌にも出ていた。

四三七〇 霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に我は来にしを

四三五〇 庭中の阿須波の神に小柴挿し吾は斎はむ帰り来まで

四三七四 天地の神を祈りて征箭貫き筑紫の島を指して行く我は

四三九一 国々の社の神に弊帛奉りあがこひすなむ妹が愛しさ

四三九二 天地のいづれの神を祈らばか愛し母にまた言問はむ

四四〇二 ちはやぶる神の御坂に弊帛奉り斎ふ命は母父が為

四四二六 天地の神に弊帛置き斎ひつゝいませ我が背な吾をし思はば

他に、

四三八二 布多富我美 悪しけ人なり

といった歌がある。

①の歌は次の様な状態で存在する。

四三九六 都久波祢乃 佐由流能波奈能 由等許尔母 可奈之家伊母曾 比留毛可奈之祁

筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹ぞ昼も愛しけ

四三七〇 阿良例布理 可志麻能可美乎 伊能利都ゝ 須米良美久佐尔 和例波伎尔之乎

霰降り鹿島の神を祈りつつ皇御軍に我は来にしを

右の二首は、那賀郡の上丁大舎人部千文のなり

右の訓みは『万葉集 東歌・防人歌』（水島義治）からであるが、最後の「我は来にしを」の「を」をへ感動の終助詞としてゐる。

『全集』（昭50・10・31）には、

このヲは逆接。前の歌の妻を思う情にみずから反発しようとする気持を含める。

と云い、

天皇の兵士として、おれは来たのだに

と口語訳する。

珍らしいことにこの作者は二首採録されていて、両者が何らかの関連を持って存在したのであろう。

しかしこの二者は大分違った雰囲気を持つ歌であることも読みとれよう。

「筑波嶺のさ百合の花の」「夜(ユ)床」というが、作者は「那賀の郡」の出身である。サユルの花のユ床という同音の修辞であるとしたら、筑波嶺とユ床とは遠距離すぎるのではないか。「サユル」「ユドコ」「カナシケ」が訛音であるとしたら、それと一対の「霰降り」の歌には一ヶ所も訛音がないのはどうしてなのか。同一人がどうしてこう雰囲気歌を作り得たのか。

前者はいわゆる東歌(の範疇の歌)ではないか。それを披露して防人出兵の儀式歌とした。それにしてもこの両首、短歌というものの、それぞれの機能の完璧さを思わせるような歌である。人類はこれほどの完成度の歌を再びは作れないのではないか。

「須米良美久佐」はスメラミイクサ、皇軍と訓まれている。防人には他に戦争を予想しての歌はないから、戦いに行くという意識で出発したわけではないだろう。「いくさ」は軍人、軍隊のことで、一般的には支配者によって組織される、殺人・抑制・弾圧の武装集団である。「み」が加えられて「みいくさ」というのは政府の役人による表現であろう。

そうしたものの統合性は大伴家持にある。

追痛防人悲別之心作歌一首

大君（おほきみ・すめろき）乃等保能朝廷等……登利我奈久安豆麻乎能故波 伊田牟可比加敝里見世受弓（顧みせ  
ずて）伊佐美多流多家吉軍卒等（猛き軍士と）……

とある様に、防人歌のたった一例の「いくさ」（皇軍）は家持の中にあつた。

『常陸風土記』で、

於是 有国栖名日夜尺斯夜筑斯二人 自為旨師 堀穴造堡 常所居住 覬伺官軍 伏衛拒抗 健借間命 大起權議  
校閱敢死之士

というのを『大系』は「みいくさ」「いくさびと」というように訓んでいる。

久茲郡薩都里「発兵誅滅」は、

いくさをおこして、誅ひ滅ぼしき

と訓まれて、「兵」は戦いを云うのだろう。

加うるに「すめら（美久佐尔）」の「すめら」に關しては、

すめらへに 二〇 四四六五 大伴家持

「すめらわれ」ともある。

すめろきの 一八 四〇九四 //

一八 四一一一 //

三 三三二 山部赤人

一九 四二〇五 大伴家持

七 一一三九

- 一一 二五〇七 人麿歌集
- 六 一〇四七 福麿歌集
- 一八 四〇九八 大伴家持
- 一五 三六八八
- 一七 四〇〇六 大伴家持
- 一八 四〇八九、四〇九四、四〇九七、四一二一
- 一 二九二 一六七 人麿
- 二 一六七 金村歌集
- 一九 四一四〇 大伴家持

以上、大まかに言つて、「すめろき」という表現は人麿に初められて大伴家持に終束される。

ついでに、先の家持の歌にみられた「顧みせずて」は四三七三

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出て立つ我は

右の一首は、火長今奉部与曾布のなり

にみられる。昔は四三七〇「霰降り」の歌と共に防人歌の双璧としてたたえられた。

右も役人の手を加えられた、いわば防人宣誓の歌ではなかったか。「醜の御楯」には「いくさ」の性質が出ている。

宣誓（式）というのは主催者に対して、と共に軍隊（兵）に対して規制力を持たせられる。その規制性は国家の意識のようなものである。以上の両者は戦争中の日本で好まれた歌で、国家的全体性の意識を含み得た。

「かへりみ」という表現は、



かへりみしつ 二〇 四四〇八 大伴家持

二〇 四三九八 大伴家持

一 七九

かへりみず 二〇 四三七二 倭部可良麿

一〇 二〇一九 柿本人麿

かへりみすれど 二 一三一 //

二 一三五 //

二 一三八 //

かへりみすれば 一 四八 //

かへりみせず 二〇 四三三一 大伴家持

かへりみなくて 二〇 四三三七 (防人歌)

かへりみに 一二 三三三二

かへりみは 一八 四〇九四 大伴家持

ここでも、「かへりみ」もまた柿本人麿から出て、家持に収っている。

②「あすはの神」は、

屋敷の神(全註釈)

旅行を守る神(注釈)

農業神(集成)

など考えられているが、屋敷の神に旅の安全を祈ってもいいだろう。

### ③その他の神

四三七四 天地の神を祈りて征箭ぬき筑紫の島を指して行く我は

というのは、前の、四三七三「醜の御楯と出で立つ我は」と下二句が対のようになってゐる。

四三九一 国々の社の神にぬさ奉りのあがこひすなむ妹が愛しき

といった、国々、地方の社というのは本来無数にあったのだろう。こうした言わば、ただの神々こそ神秘に身をひそめる可能性としてあつたろうに、住民、国民がグローバル化、王化する時に、神も一般化（非神秘化）されてしまうだろう。

大君たちの作つた神、古事記の作つた神、風土記が作つた神以外に、この国の人々は神を作ること？ 見る事ができなかった。

故にすべての出来事は国体の範疇にあつた。この国の構造からは神は成立してこない。

神々は打ち滅ぼされ、天つ神に合祀され、天つ神の御子神となつた。神秘なもの、意味不明なものは国家からも人からも失われた。

四三七四 天地の神を祈りて

四三九二 天地のいづれの神を祈らばか

四四二六 天地の神にぬき置き

など「天地の神」という表現は、万葉集では伝統的、一般的なものであつた。

「天地の神」というのは天神地祇ということであろう。それにしてもこうした用法は安易すぎる。これは標語の様

なものである。これは形式的に他から与えられたものだろう。ここに「祈り」は拡散されてなくなっている。

多分、「天地のいづれの神を祈らばか」というここ一例の表現は右様の事情によっているのだろう。

四三七三が他者によって与えられた表現であるように、それに続いた四三七四もまた、儀式の主催側によって与えられたものであろう。同じように与えられた「天地の神」とはどれだろうと求めたのが四三九二であった。

一方「ちはやぶる」(神)には地方の、荒ぶる、まつろはぬ性質を示しているようだ。

四四〇二 ちはやぶる神の御坂にぬき奉り斎ふ命は母父が為

右の一首は、主帳埴科郡の神人部子忍男のなりとある。

「神の御坂」は神坂峠といわれている。

ここは、

四三七二 足柄のみ坂たまり

と同様に祭祀儀礼の行われる所であつたろう。

東歌に、

三三七一 足柄の御坂畏み曇り夜の吾が下延へを言出つるかも

は「神が鎮座すると信じられた」(『東歌・防人歌』)とすれば、この「み」坂には神が含まれると見てよいだろう。

四四二三 足柄の御坂に立して袖振らば家なる妹は清に見もかも

四四二四 色深く背なが衣は染めましを御坂賜らばま清かに見む

の夫婦の唱和儀礼も神を意識した歌であらう。

ただし、四三七二の「美佐可多麻波理」は「た廻り」(『略解』)ともいわれる。

「ちはやぶる」という言葉は東国の歌ではここ一例である。

|    |      |       |        |
|----|------|-------|--------|
| 二  | 一〇一  | 千磐破   | 大伴安麿   |
| 二  | 一九九  | 千盤破   | 柿本人麿   |
| 三  | 四〇四  | 〃     |        |
| 四  | 五五八  | 〃     | 土師水道   |
| 四  | 六一九  | 〃     | 大伴坂上郎女 |
| 七  | 一二三〇 | 〃     |        |
| 一一 | 二四一六 |       | 人麿歌集   |
| 一一 | 二六六〇 | 千石破   |        |
| 一一 | 二六六二 | 千羽八振  |        |
| 一一 | 二六六三 | 千葉破   |        |
| 一三 | 三二三六 | 血速舊   |        |
| 一三 | 三二四〇 | 千速振   |        |
| 一六 | 三八一一 | 千磐破   | 車持氏娘子  |
| 一七 | 四〇一一 | 知波夜夫流 | 大伴家持   |
| 二〇 | 四四〇二 | 知波夜布留 | 防人歌    |
| 二〇 | 四四六五 | 知波夜夫流 | 大伴家持   |

ここでも「ちはやぶる」神は、柿本人麿から大伴家持への系譜であつた。

防人歌の成立の基盤には天皇や國・郡司の存在があるし、もっと言えば、防人歌は天皇―大伴家持―部領使の情熱から成立してくる。それが歌という形で成立していることには勿論文学的理由があるだろう。

大和に國家の政府が作られて以來、人は言語の不可能性を強いられ、國府に於ても同様であつた。それが、風土記に、

筑波嶺に廬りて妻なしに我が寝む夜るは早やも明けぬかも

といふのは筑波峯之會といふ農耕祭の歌である。また、

高浜に來寄する浪の沖の浪寄すとも寄らじ子らにし寄らば

も春秋の農耕祭に起源を持つものである。こうした短歌形式の表現は日常性、政治生活を逃れた言語表現である。

だから短歌表現は儀禮の世界、酒宴、送迎宴などに利用された。防人歌も同様であろう。これらの歌（人）は政治の世界から抹消されるものとしてある。

### 三

神はない唯一者であつて、人は在る単独者である。その間にロゴスといふ日本語の言葉がある。

二人以上の人に話するときから、話は組織に似、國家に似る。そこではへひとりゝは失われ、同時に話者も對者も失われる。

この言語の不可能性を言語らしく思ひ、信用させてゐるのは組織と國家である。社會的人間、支配者、國家的構造の話は制約、抑止、否定的性質としてある。組織や國家での言語の不可能性は言葉の傲慢性、暴虐性として存在す

る。

『歴史序説』(第四章 市町村などの都会文明の形態)に「公權威の大半は、概して暴虐的である」というのはイブ  
ン・ハルドゥーン(一三三二—一四〇六)であるが、十四世紀の「歴史」にこんな言葉があったとは珍らしい。

当然、国には上国(中国)下国がある。世界的には大国(中国)小国があつて、加えて超上国や超大国がある。伴つ  
て下国、途上国というものもある。

超大国は常に説明し、語り続ける。正義と安定を主張し続ける。侵略と慰撫を伝承する。

「或るひとへらく、倭武の天皇、東の夷の国を巡狩はして、統治の県を幸過ししに、国造毗那良珠命を遣はして、  
新に井を堀らしむるに、流泉淨く澄み、尤好愛しかりき。時に、乗輿を停めて、水を飮で、み手を洗ひたまひしに、  
御衣の袖、泉に垂りて沾ぢぬ。便ち、袖を漬す義によりて、此の国の名と為せり。」

飲料水、用水に倭武天皇の手、袖が触れる。そのことがヒタス・ヒタチの国名になっている。と或人(多分古老)  
が話し続ける。いわば超大国の侵略と慰撫によつて国が存在する。

これが正義と安定の骨格である。これが論理と説明の意味である。単独者はいない。平和は倭武天皇の手(袖)か  
ら垂れてくる。

神はサタンなしには情熱化しない。サタンは単独者の向こう側、即ち二人目の存在である。社会に似、国家に似、  
歴史に似ている。それは二人以上と話ができる条件を基礎にしている。言葉というよりは記号的構造を持つ。だから  
サタンは人間のもつとも合理的、理論的、説明的なものであつて、そこに単独者は消失する。サタンはしかしその単  
独者なしには生きられない。即ちサタンは神を信用している。彼はイエスの孤独を救済しようとする。

「悪魔またイエスを最高き山につれてゆき、世のもろもろの国とその榮華を示して言ふ。なんぢ若し平伏して我を拜

せば、此等を皆なんぢに与へん。」（マタイ四―10）

国と栄華はサタンのものである。

〈前代未聞の有害な迷信に囚われた人種であるクリストウス信奉者〉を処罰したのは、超大国の皇帝ネロである。あるいはこの辺りまでは神と単独者が存在したのかも知れない。処罰されたものは国家と歴史を去った。

サタンは人が生きようとする時に湧いてくる。そして単独者に襲いかかる。

イエスがペテロに言う。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思はず、人間のことを思っている。」（マルコ八・33）というのは人間のこと」はサタンの性質。

「簡単にいうなら、神がこうあることを欲すのである。」（教父ラクタンティウス）  
というのは神がサタンの出現を求めていること。

サタンは、神・ロゴス・人の系譜で、神への観想をさまたげるようにする。サタンは単独者と社会生活の関係である。

アウグスティヌスのように、

〈神が限定を受けるということは決してない〉

〈神の手が書いた文字は一字たりとも変えられない〉からサタンがいるのだろう。さて、

〈悪とは自由意志が罪を選ぶことである〉

〈自由意志の撰択に原因はない〉

などと言ってみて、自由は社会生活に似ている。もつともよく似ていて、そのことが原因も理由もない原因と理由で

ある。

diabolos (対立者)、satan (妨害者)、devil (悪魔) と並べてみるとよく判る。それらは神の性質なのである。生活や社会や、歴史への対立者のこと。

二人目(夫婦)、父母(家族)、社会(村・里)でありえない者。

〈現在のこの時代または世(アイオーン)は悪である〉(聖イグナティオス・一〇七殉教) という。

なぜ単独者なのか、それは神というものとの関わりは個人でしかありえないからであり、認識というのも個人についてのことだからである。

この世で二人以上で知るということは決していないからである。グノーシスはひとりの世界である。それに相應するように神がある？

人はその言動をつきつめれば神のようなものに到るらしい。

#### 四

一国の風土記が、ほとんどすべて、古老の申告によつて編成されているのは面白い。超上国の侵攻が被侵攻国と融合したようになっていて調和。国民は超上国の侵攻に順化し、融合的な性格を形成した。そこに宗教(神)が生育してくることは全くなかった。国民は超上国の神道に生活を合わせて行つた。

① 種の神は常陸風土記に次の様に出ている。

「古老のいへらく、難波の長柄の豊前の大朝に馭宇しめしし天皇のみ世、己酉の年、大乙上中臣(一)子、大乙下中



臣部兔子等、惣領高向の大夫に請ひて、下總国、海上の国造の部内、輕野より南の一里と、那賀の国造の部内、寒田より北の五里とを割きて、別きて神の郡を置きき。其処に有ませる天の大神の社・坂戸の社・沼尾の社、三処を合せて、惣べて香島の天の大神と称ふ。因りて郡に名づく。」

「那賀国造の部内」では、「天皇」と「香島の天の大神」は生活に根づいていたろう。

常陸国の時を測るのは大和国の朝廷である。と共に常陸国の構造は大和の構想の網の目に沿っている。

〔新治郡〕 古老のいへらく、昔、美麻貴の天皇の馭宇しめししみ世

〔筑波郡〕 美万貴の天皇のみ世

〔信太郡〕 大足日子の天皇

〔茨城郡〕 息長帯比売の天皇

〔行方郡〕 難波の長柄の豊前の大宮に馭宇しめしし天皇のみ世

〔香島郡〕 難波の長柄の豊前の大宮に馭宇しめしし天皇のみ世

〔那賀郡〕 (最前を略く)

〔久慈郡〕 淡海の大津の大朝に光宅しめしし天皇のみ世

〔多珂郡〕 斯我の高穴穗の宮に大八洲照臨しめしし天皇のみ世

常陸の国は「郡」「里」ことごとくスメラミコトの網の目に敷き込まれる。国土、風土というのは人が〈そう〉成長する環境である。

常陸国人は超大国の王、天皇の風土に育った。

一切は古老が話したものか、役人が書いたものか、その両方であろう。古老というのは郡司の関係者。古事記を基

礎にした協同作業であつたろう。面白いことに、

「高天の原より降り来し大神のみ名を香島の天の大神と称ふ。俗云 豊葦原の水穂の国を依さしまつらむと詔りたまへるに、荒ぶる神等。又、石根・木立・草の片葉も辞語ひて、昼はさばへなす音声ひ、夜は火の光明く国なり。此を事向け平定さむ大御神と、天降り供へまつりき。」

あるいは「石根・木立・草の片葉も言問ひ、さばへなす音声、夜の火の光明」ことが「ヘカミ」ではなかったか。それを「へくにひと」「古老」が天の大神と一緒に押しつぶしてしまった。風土記の物語は超上国の役人と国人の一致によつて構成される。「平定」「平和」というのは序列、順応となつて表われる。ここで成立するのは神の非認である。話すこと、書くことは神の喪のように行われる。

「坂戸の社」「沼尾の社」も「惣べて香島の天の大神」の中に消え入る。

「平定」というのは平定者の現実であるから、平定+被平定が何か他の言語表現になつてみることはない。言語は被平定を表現することが不可能なのである。故に「創造の神」「全能の神」という思惟が生れたのであろう。

言葉（説明）は神を隠滅する。神は大国の部品となる。神がなくなると人間もなくなる。神のない人間というのは社会構成の「数」となるだろう。

「阿良例布理 可志麻能可美乎」は、香島郡に「風俗説云ニ霰零香島之国」とあるが、この香島郡は香島の天の大神に「因りて郡に名づく」わけで、本来「香島」は地名でしかなかった。多分、「アラレフルーカシマ」という云い方が発端ではないか。

逸文（肥前国）に、

婀娜礼符縷 耆資麻加多塏塏 嵯峨紫弥台

アラレフル キシマガタケヲ サカシミト

とみられるようにアラレフルは連体形でキシマ（地名）にかかっている。

これらは激しい音を立ててアラレが天から降ってくる―地名（キシマ・カシマ）という形ではないか。

「高天原より降り来」―「香島の大神」

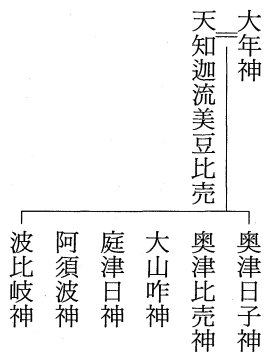
「高天原より降り来」―「御子神・軍神」

即ちアラレフルは天神の降臨の象ではないか。キシム、カシマは山、丘、森（三峯、香島社）など神の鎮座する場所ではないか。

先にもあげた沼尾社に關して、「其の社の南に郡家あり。北に沼尾の池あり、古老のいへらく、神世に天より流れ来し水沼なり」とある。香島社もまた「天より流れ来し水」||アラレになるのではない。この古老は「郡家」の關係者であろう。激しく天から降るものと、神の居る土地が結びつけられた。

②種「アスハの神」は、

『古事記』に次の様で出ている。



『大系』に「名義共に未詳であるが宅神である。祈年祭祀詞の中に、座摩の御巫の祭る皇神等として、生井、栄井、津長井、阿須波、婆比支の名が見える。」

「六月の月次」もほぼ同様。

『古典集成 万葉集』 農業神。

この神が防人歌に出てくるのは、宮廷祭儀の神を自宅で祭るほどの余裕を持った人が、少くとも上總国に居たことを示す。四三三八「国造丁」、四三四九「助丁」、ときて、次の四三五〇「帳丁若麻統部諸人」の歌である。国造に近い所に位置していた人であろう。

③種 その他の神々

〔新治郡〕 名を油置売命と称ふ。今も社の中に石室あり。

〔筑波郡〕 筑波の神。雄の神（女の神）

〔信太郡〕 飯名の社あり。

〔行方郡〕 北に香取の神子の社あり。

其の里の北に、香島の神子の社あり。

箭括の氏の麻多智、郡より西の谷の葦原を蔽ひ、壑闢きて新に田に治りき。此の時、夜刀の神、相群れ引率て、悉尽到来たり、左右に防障へて、耕佃らしむることなし。俗いはく、蛇を謂ひて夜刀の神と為す。其の形は、蛇の身にして頭に角あり。率引て難を免るる時、見る人あらば、家門を破滅し、子孫継がず。凡て、此の郡の側の郊原に甚多に住めり。是に麻多智、大きに怒の情を起こし、甲鎧を着被けて、自身仗を執り、打殺し、驅逐らひき。乃ち、山口に至り、標の税を堺の堀に置いて、夜刀の神に告げていひしく、「此より上は神の地と為すことを聴さむ。此より

下は人の田と作すべし。今より後、神の祝と為りて、永代に敬ひ祭らむ。冀はくは、な崇りそ、な恨みそ」といひて、社を設けて、始めて祭りき。……壬生連鷹、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめき。時に夜刀の神、池の辺の椎株に昇り集まり、時を経れども去らず。是に、鷹、声を挙げて大言びけらく、「此の池を修めしむるは、要は民を活かすにあり。何の神、誰の祇ぞ、風化に従はざる」といひて、即ち、役の民に令せていひけらく、「目に見る雑の物、魚虫の類は、憚り懼るるところなく、隨尽に打殺せ」と言ひ了はる応時、神しき蛇避け隠りき。というのは開墾、治堤の時に、夜刀の神を閉塞し、打殺した話である。この、

〈何神誰祇 不従風化〉

というのは、人類の歴史が終るまで、これ以上、傲慢な言語表現が不可能と思われる、超大国のする傲慢極まる言葉であつた。

残念ながら神というのは、

民を活かす働きなどしなかつた

家庭の平和、発展など助けはしなかつた

男女の恋愛など成就させようとしなかつた

道中の安全などを守りはしなかつた

まして国益など支援しはしなかつたし

人の幸福などには気づきもしなかつた

神（唯一者）＝根源的自己（単独者）が「風化に従う」（王化、皇化）などという言語表現は人間に於ては成立しやうがない。

そう、そうだから、その言葉と同時に「神蛇避隠」というのであろう。神が隠れてしまつて国民生活が成立して行つた。生活してゆく限り神が現われることはない。

神は無いものである。神だから。

北に香取の御子の社あり。

とあるように香島・香取の御子社が多い。

東の山に社あり。

二つの神子の社あり。香取・香島分祠。

野の北の海辺に香島の神子の社あり。

〔香島郡〕 天の大神の社・坂戸の社・沼尾の社、三処を合わせて……

というように天神の系列に入るものもあつた。

〔那賀郡〕 其の子孫、社を立てて〔片岡村〕

〔久慈郡〕 太田の郷に、長幡部の社あり。東の大きな山を、賀毗礼の高峯と謂ふ。即ち天つ神有す。

この「神峰山」の神については次の様に続いている。

名を立速男命と称ふ。一名は速経和気命なり。本、天より降りて、即ち松沢の松の樹の八俣の上に坐しき。神の崇り、甚だ厳しく、人あり、向きて大小便を行つ時は災を示し、疾苦を致さしめければ、近く側に居む人、毎に甚く辛苦みて、状を具へて朝に請ひまをしき。片岡の大連を遣はして、敬ひ祭りしむるに、祈みてまをししく、「今、此処に坐せば、百姓近く家して、朝夕に穢臭し。理、坐すべからず。宜、避り移りて、高山の淨き境に鎮まりますべ

し」とまをしき。ここに、神、禱告を聴きて、遂に賀毗礼の峯に登りましき。

という話である。村人に厄介な神もあつて、それを高山の峯に移したという。としたら山の神などは人々の厄介な神であつたということにもなるだろう。

「古老のいへらく、天地の権輿、草木言語之時」は天より降り来し神以来消失した。

「荒ぶる神等、又石根・木立・草の片葉も辞語ひて、昼はさばへなす音声ひ、夜は火の光明く国」も「此を事向け平定さむ」大御神が天降つて来てからは消滅した。

カイザルのものはカイザルへ、カミのものはカミへと帰つて行つた。しかし、ここには、

ヘカイザルのものはカイザルに、神のものはカミに返しなさい。そして私のものは私に返しなさい。ン

とトマスがつけ加えた、最後の「私のものは私に返しなさい」がない。人間に内在している本来的自己＝私のもの、がない。これは多分、決定的違いなのである。

東歌に、

三三七一 足柄の御坂畏み曇り夜の吾が下延へを言出つるかも

中臣宅守に、

三三七〇 畏みと告らずありしをみ越路のたむけに立ちて妹が名告りつ

という歌がある。折口信夫は、峠の神が人間に一番重要なもの、心の奥の秘密を要求するのだと言っていたが、厄介払いされた神にはそんな情熱はあるまい。神と人の心の密通というこの微妙、豊醇な世界がなければ、即ち心の世界の発見、顕証がなければ、そう、神は存在しても仕方のないものである。

でも、神というのは案外はつきり見えるものである。この世には神の歩いた道というものがある。あるいはイエス

達の歩いた道がある。それは山でも峠でもはつきり見える。目に見えない神があらうか。

多分、人は「文化大革命の下で自分の言葉を失った」のではなく、人というのは言葉の不可能性によってしか生きてはいないのだ。

「彼がやっとものが言えるようになって早々、祖父の郊外の別荘で、たまたまやかましく鳴いていた蛙に「黙れ」と命じたら、それ以来、そこで蛙がやかましくなくなかったといわれている。」（『ローマ皇帝伝』）

というのは超大国、ローマの皇帝アウグストゥスの話である。ローマの蛙は皇帝の言葉を聞いた。ローマ帝国から神は見えなかった。

四八 イエスが言った、「二人の者が同じ家でお互に平和を保つならば、山に向かって、『移れ』と言えば、移るであらう」（トマス）

というのは二人、男女、分裂しているものが原初的統合し、人が単独者としてありえたら、ということなのであらう。その時、言葉と存在が一致する。即ちその時、山がそこに在るのだらう。あるいは単独者には山など何処にあってもかまわないのであらう。

官人、その名前のままに、単独者を生きることにはない。へ大君の命畏み、国庁に赴任する。道中、いつでも大君がっている。超大国の大君の代々の王が侵攻し、巡行した国々、それは縦糸となり、古老（国造）たちの横糸で織りなされる風土記がイメージにある。

超大国と国々は同じ模様をしている。その模様の一部に神がある。

防人（歌）は、その国司赴任の裏の頁にある。東歌と違つて個人名で出征する防人歌には神が少し多くなっている。  
四三五八 大君の命畏み出で来れば



といへば、この初句は官人家持の好きな言葉であつた。

神に気づいたことのない王（支配者）の国民が神に気づく機会を持つことはない。超大国・大和の官人と地方の国造の合作が風土記であり、その風土記から出征するのが防人（歌）であろう。この集團組織の言語表現は神を素通する。単独者がありえないのである。

## 五

たとい、ひとりでの祈りがあつたにしても、その祈りが国家の行事に使われると、祈りは多分変質してしまうだろう。それまで山川、湖沼の神々も朝廷神のもとにまとめられ、総社の態勢を持つと、自然の中に神の姿を求める心情は薄れて行くしかないだろう。

今、はやっている言葉に、

へそれでも疑惑がクリーンになつたわけではない

という云い方がある。社会があるという矛盾によつてクリーンは国家の構造である。神々が総社というものになつた時クリーンという表現がでてくるのであろう。

その時、人は神を見る（思う）能力を失うのであろう。それは同時に言葉の可能性でもあつたろう。

そこでは父は子に、子は父に、母は娘に、娘は母に〈対立〉することはないものとしてある。

では、イエスが山上で民衆に話したという、二人以上に話せる能力とは一体何なのか。

一一四 シモン・ペテロが彼らに言った、「コリハムは私たちのもとから去つた方がよい。女たちは命に値しないから

である」。イエスが言った、「見よ、私は彼女を（天国へ）導くであろう。私が彼女を男性にするために、彼女もまた、あなたがた男たちに似る生ける霊になるために。なぜなら、どの女たちも、彼女らが自分を男性にするならば、天国に入るであろうから」（トマス）

「見よ、私は彼女を導くであろう」

この話は共観福音書にはない。マグダラのマリアは女として成立しない。ここには女性が神の中に成立するという針の穴がある。

女は神に似ている。使徒集団から拒否された一人の女に話しかける、言語の不可能性が神に似ている。

「たぶん女性たちは靈感を豊かなものにするためのみ存在しているのであり」（シオラン）。

トマスはこう言う。

「イエスが言った、『単独なる者、選ばれた者は幸いである。なぜなら、あなたがたは御国を見出すであろうから。なぜなら、あなたがたがそこから（来て）いるのなら、再びそこに行くであろうから。』（四九）」

「そこへ、〈単独なる者〉〈選ばれた者〉は〈御国〉との同一性なのである。

単独者を出て、単独者へ。思惟と生命と、そして結果が同一であるような形。

多分、人が知ることと充ちて行くためには、植物のように、それ自体が感じていくことだろう。

七七 イエスが言った、「私は彼らすべてのの上にある光である。私はすべてである。すべては私から出た。そして、すべては私に達した。

というのも他の福音書にはない。〈木にも石にも動物にも、最も価値の低いものにも〉内在する思惟、それが論理というものだろう。

神は人間（個人）の意志で、政府の決議で、他国の要請で、祈ったり、祈られなかったりするようなものではない。  
〈何人も、その宗教の自由は〉

など憲法に書かれるようなものではない。

祈り（信仰）は神にしか属しない。

痴呆症というのは病気の仲間かと思われようが政治の仲間でもある。

国家に管理され、その構図に組み込まれた神は、神という名の、生活の部品にすぎない。

人が受け入れる言葉は法律と規約だけである。それは明瞭で、人生的だから。

ほんとに大国と小さき者は似ていない。単独者における神は幸福でも不幸でも、平和でも動乱でも、喜びでも悲しみでもない。

グローバルと単独者の関係はテロだったり、殉教だったりする。生き残って歴史であるものはグローバルのものであり、テロリストと殉教者は歴史を擁護できない。

人間の歴史というのは神の敵かも知れない。